

七 『三根先生追悼誌』より



三根圓次郎先生

三根圓次郎先生略傳

先生は明治六年三月十日、長崎縣西彼杵郡瀬戸町檜浦郷に生る。家は代々大村藩の大庄屋にして、先考は壯平氏、先生は其の末子なり。兄弟七人あり次兄を源四郎氏と言ひ早くより分家す、先生は入りて同家を襲ぐ。

先生、幼より慧悟衆に拔で、また頗る讀書勉學を好み、孤燈の下夜半を過ぐるも寢に就かず、爲に慈母先生を警むること屢々なりき。學業成績固より拔群にして先生十二歳の時、小學中等科第五級より第四級に進み二箇月にして直ちに第三級に躍進せしことあり。（當時の學制、半年を以て一級となす。）

明治十九年私立大村尋常中學校に入り廿四年同校卒業、次で熊本第五高等學校第一部を経て東京帝國大學文科大學哲學科に入學、明治三十年七月之を卒業す。此の間常に學業優秀品行端正を賞せらる、賞状なほ先生の家に存す。先生の文科大學に學ぶや學資必ずしも豊かならず、此を以て芝に居住せる伯父の家に寓して家庭教師等を爲し、又同家より本郷の大學迄徒歩往復して一日も怠らず以て身心を練る。先生の標語、健、研、儉は先生之を少壯より實踐躬行して渝らざりしなり。

今や若き俊才は實社会に直面せり。先生の天資と先生の努力とを以てせば中央の哲學者として學界思想界に貢献し、華々しき名聲従つて到らんことも期して待つ可し。然るに先生は敢へて極めて地味なる一教育家となれり、蓋し先生の國土的信念牢固たるものありたるを以てなり。思ふに先生の大學に入りし明治廿七年夏は日清戰爭勃發の時なり、其の大學を出でし明治三十年は一方三國干涉に恨を吞みし青年日本の臥薪嘗膽の時、他方立憲政治確立せられ産業・文化は浸々乎として日に進むの時なり、獨立不羈の愛國者的自覺と進歩に對する確乎たる信念とは日本全國就中青年層を把握せり。然れども此の間往々にして固陋なる排外保守に流るる者あり、浮薄なる歐化に惑溺する者あり、正に日本の疾風怒濤時代なり。世既に斯の如し、少壯學士亦多少の感慨なくんばあらず。此に於てか、常に國民的自覺を堅持し不斷に進取的なる人材を養ひ、以て國家百年の基を築かんことこそ己が天職なれとは、先生が熟慮の後到達して終生揺がざる信念とはなれり。

先生、斯の天職の自覺と識見とを以て大學卒業後四箇月の後明治三十年十一月、教育界の第一歩を山形縣立中學校教諭として踏み出せり、英語科、修身科を擔任す。爾來同校に在ること一年半、明治三十二年四月福岡縣立東筑中學校に轉じ、次で同三十四年六月佐賀縣立第三中學校（後唐津中學校）に校長となる。教育界に入りて僅か四年に滿たずして既にこの重任に就けり、時に先生年二十九、銳意校風の振興に努め少壯校長の名漸く高し。居ること五年、明治三十九年一月縣立佐賀中學校長に轉じ、四十二年三月縣立徳島中學校長に任ず。次で大正元年十二月、先生には想ひ出深き山形中學校に校長として再任せり。在任七年の長きに及び、先生の薰化は洽く生徒に浸潤し、前任諸校の生徒等と同じく同校出身者も亦永く先生を敬慕して止まず。

大正七年四月、山形より縣立新潟中學校長に轉任す。是の歳高等官四等を以て待遇せらる。翌大正八年四月の頃東京に於いて先生を某高等學校長に聘せんとの議あり、先生肯かず、蓋し其の地位は制肘多くして眞に自己の信念を以て教育に當るを許さざるを惧れたると、且教育の効果は少年教育に於いて愈々發揚せらるゝことを信じたるとを以てなり。先生の名利を輕んじ信念を重んずること斯の如し、其の剛直を以て聞えしも宜なり。

然れども先生を以てしてもなほ外的勢力と傳統的因襲との往々先生の志を妨ぐるものあり、先生之を嘆じ其の抱負を遺憾なく實現し得べき機會を待つ、譬えば猶良農の上田を得んと欲するが如し。恰も好し茲に土佐中學校は創立されたり。之より先高知市の富豪川崎幾三郎、宇田友四郎の兩氏、維新の際英傑輩出せる土佐にして近來教育振はず人材漸

く凋落せんとするを憂ひ、巨資を投じて新に中學を興し大に英才を育まんとす。元新潟縣知事北川信從氏専ら議に參じて奔走せり。其の趣旨は機械的多數劃一教育の弊を矯め少數英才の個性長所發揮を圖り將來邦家各方面の指導者たるべき基礎教育を爲し、以て郷土並びに國家に報ぜんとするに在り。是の如きは固より尋常教育家に托し得べき任に非ず、北川氏等爲に校長招聘に大に苦しむ。偶々氏の知友にして土佐出身なる中等教育界の元老に當時東京府立第一中學校長川田正澈氏あり、北川氏此に議るに新設校々長の事を以てす。川田氏は夙に先生を推重して措かざるもの、直ちに先生を薦む、先生亦快然之を諾す、乃ち大正九年一月十四日新潟中學を辭し同日私立土佐中學校校長に就任、學校運営の全權を委ねらる、教育畑の最良農は望み得る限りの美田を得たるを喜び。土佐中學校は先生を得て始めて成り、先生は此處に漸く宿志を伸ぶるを得、教育界の一奇にしてまた聖代文運の祥事と謂ふべし。

先生、嚮むかに明治三十二年九月、東京に於て石井信敬ノブキ氏の女敬子と結婚せり。岳父は栃木縣の人、師範學校長・中學校長等を歴任して關東中等教育界の名士たり。敬子夫人亦賢夫人の名あり、先生の新潟を辭せる時先生との間に男子二人女子三人あり、良く先生を助け子女を養育す、然るに時に不幸にして疾あり、先生心に之を憂ひたるも新任務の重きを思ひ夫人等家族は東京に靜養せしめ、單身赴任するに決せり。夫人は此の後疾全く癒え今に健在なり。令息令嬢並びに成人し皆先生を恥かしめず。

先生、大正九年二月八日を以て高知に着任、直ちに學校開設準備に努め、同年四月十六日、本科生徒廿八名に入學を

許可し、高知市帶屋町川崎氏控家を假校舍として授業を開始す。越て五月六日、豫科入學式を擧げ第一學年生十名第二學年生十五名に入學を許可す、此に於て幾多の鳳雛を育むべき土佐中學校の基礎成れり。爾來先生は其の瞑目の瞬間に至る迄全心身を擧げて土佐中學校に捧げたり。此の後知己川田正激氏が先生を自己の後任に望みしことも一再ならず、而も先生一顧だにせず、況や他の、名利を以て先生を誘ふ者をや。

大正十一年四月、高知市外潮江村（現在市内春野町）に二階建本校舎及び寄宿舎其他附屬設備竣功し、新學年より此に移る、筆山の麓鏡川の畔校舍巍々として咿唔の聲雲に響く、先生見て莞爾たり。

大正十三年四月第一回四年修了生廿二名を出す、内十九名は直ちに上級學校に進む、斯の如きは先生に在りては固より豫期の成果なりと雖も而も全國中等教育界空前の成績なり、此後も亦毎年斯の如し。先生の理想の一端は着々實現の緒に就けり。

樹高くして風の當るや強し、先生と學校の聲望揚るに伴ひ或は輕率なる誤解、或は浮説に雷同せる非難、或は爲にせんとする中傷は動もすれば土佐中學校に浴せられたり。或は先生以下職員生徒一體となりての眞摯猛勉強を目して詰込主義と做し、土中は生徒の體育養護に缺くと爲す者あり、先生敢て關せず。或は土中は智育に趨りて德育を輕んずと言ふ者あり、先生論者の無知を憫むのみ。或はまた土佐中學校收容生徒の少數なるを目して時代の教育普及主義に逆行せる貴族主義なりと非難する者あり、これ固より土佐中學校創立の動機目的を知らず又は強て之を曲解するに出づ。一般

中等教育は普通の中學校と雖もなほ克く之を果す、先生の爲さんと欲し創立者の先生に期待せし所以は通常劃一教育の缺を補ひ、特に少數精銳の個性的指導を徹底せしめんとするに在りて、毫も一般中等教育施設に對立し或は之を排除せんとするには非ず、猶產業界に於て大量生産の傍ら特に良質生産を圖るが如し。而してあたら大志を抱きて埋もれたる不遇の人才を發見育成するは學校並びに先生の頗る意を注ぎ且實現せる所なり。

先生の土佐中學校教育に於ては、奴隸的強制勉強、詰込主義は極力之を排撃せり。土佐中學校の猛勉強は一に先生の熱意と職員生徒の感奮と相映發せるものにして最も自主自發的なるものなり、強制去れば直ちに消ゆるが如き類に非ず、従つて生徒の勤勉力行は終身渝らざる第二の天性となれり。而して努力は體力を俟て始めて恒久的たるを得べし、故に先生不斷に意を之に注ぐ。其の一二を擧ぐれば、或は特に體育科目時間を増し毎日少くも一時間は之に充つ、或は對校競技選手制度は選手養成に急にして運動場乃至器具の選手獨占到傾き却て一般生徒の運動を阻げ易きを以て之を排し、廣く全校生徒の運動を奨勵す。始め生徒の制服制定に當りて詰襟服は發育期少年の身體に拘束多き故に寛濶なる背廣服を用ひんとせり、事は其の高價なるが爲に已みたれども、なほ先生の意の存する所を察するに足るべし。其他先生が生徒各人につき直接隨時適切なる個人健康指導を與へし事は之を本誌後章の先生追憶文に徵證すべし。

先生の徳育に努めしは固より論なし。凡そ學校に於ける徳育の成果は先づ生徒の師恩を知ると否とに端的に現はる。世に中學校多しと雖も土佐中學校生の如く衷心より終身師を敬愛し師に感謝する者あるを知らず。而して道徳は責任の

自覺と意志の自律を其の最根底とし、道德教育は被教育者の人格の獨立を承認尊重し之を愛する者にして始めて可能なり、世に教育家多しと雖も先生の如く生徒の人格を尊重し愛し其の自覺自律心を喚起せる者は稀なり。されば校内風紀規律も生徒の自治團體たる向陽會の自律に待ち、寄宿舎の日常生活は舍生をして之を自治的に運営せしめ、また文房具等の公德販賣を實施し、孰れも獨特の成果を揚げたり。勉學に自學自習を尊べることは勿論にして休暇中に多量の宿題を課す等の事は絶へてなし。先生の德育の根本に培ふこと斯の如く、加ふるに先生の高潔なる國士的信念と熱烈なる愛とを以て生徒を導く、之に導かるゝ生徒の數は少く、理解力と感受性とは他に勝れて豊かなり、徳化の周密に生徒に及ぶは蓋し必然の理にして、土佐中學校の趣旨たる少數英才教育の効果と必要性とは特に德育に於て立證せられたり。

先生は斯の如く専ら力を土佐中學校に致し敢て中央に志なしと雖も、衆望の歸する所比年全国中等學校長會議に選ばれて委員となり、盟友川田東京府立一中校長と肝膽相照らし斯界の最長老として洽く畏敬せらる。

先生、唐津中學校長在任の頃より既に眼疾の兆あり、土佐中學校來任後の寧日なき奮闘は更に之を悪化せしめ綠内障と診斷さる。昭和三年六月京都帝國大學附屬醫院にて手術を受けしも豫期に反して益々視力を失ひ殆ど失明せるに近し。先生の自ら讀書する能はざること既に久しかりしも、常に側近者をして新刊の書を讀ましめ、又努めて少壯職員乃至卒業生等と談話し、一日も新智識の吸収擴充を怠らず、天性の記憶力は益々増大し、人其の頭腦の新鮮博識深遠に驚く、双眼已に明を失ひ心鏡却て冴え明知愈々輝けり。

昭和五年八月、學校東南隅に新に校長住宅建築せられ先生此に移る、今や先生と學校とは空間的にも一體となれり。先生の育てし生徒の數は漸次多きを加へ、早くも最高學府を終へ社會の第一線に銳鋒を現はす者簇出せり、先生と土佐中學校に對する社會の信頼尊敬従つて加はり、眞摯なる父兄・初等教育家は競つて子弟を先生に托せんことを欲せり。先生の平常懷抱せる東京土中會館設立の希望實現の日も遠きに非るを想はしめたり。此の時に當り想像し得らるゝ最大の不幸は突風の如く先生と學校とを襲へり。

昭和十年三月十八日曉、一星忽焉として地に墮ちて聲あり、三根先生殞ると。衆愕然として猝に之を信ぜず、其の信なるを知りて茫然なす所を知らず、痛哭肉親を失ふよりも太し。急報に依り敬子夫人、令息徳一氏等東京より星馳し來る。出身者の各地より歸校する者亦相踵ぐ。

先生逝去の前夜、校長宅にて學校運営の事に關して客と對談し平常に異ならず、客去つてにはかに腦溢血を發し翌曉溘然長逝せらる。其の因由全く先生の久しきに亙る教育活動、心身の酷使に在るは明らかなり、且其の殞れしは學校の構内なり、最後迄語りしは學校の事なり、先生は實に身を以て教育に殉じ土佐中學校に殉じたるなり。

三月廿一日、嚴肅なる校葬を執行す、歎啼の聲堂の各所に起り、弔辭を捧ぐる者は嗚咽して其の先を續くる事能はず。三月三十日、東京大森の先生自宅に更に告別式を營み、次で遺骸を多摩墓地に葬る。享年六十有三、法諡して廣濟院釋大圓居士と號す。

昭和十七年四月、土佐中學校同窓會員一同、本山白雲氏に依頼して先生の浮彫像を製り之を母校校長室の窓外に建て、永へに先生の佛を偲ぶに資し、益々奮勵努力して以て先生の信倚に答へんことを期す。先生の形體既に亡し、先生の

精神なほ脈々として土佐中學校と教へ子とに存す、遺徳高風年と共に薰る、之を仰げば彌いよいよ高く之を鑽きれば彌堅し。

昭和十八年六月二十日 印刷
昭和十八年六月三十日 發行

〔非賣品〕

高知市春野町土佐中學校内

編輯兼發行人 土佐中學校同窓會

代表者 青木 勘

東京市牛込區山吹町一九八

印刷者 株式會社 宗文社印刷所

東京市牛込區山吹町一九八

印刷所 山本 禎 男